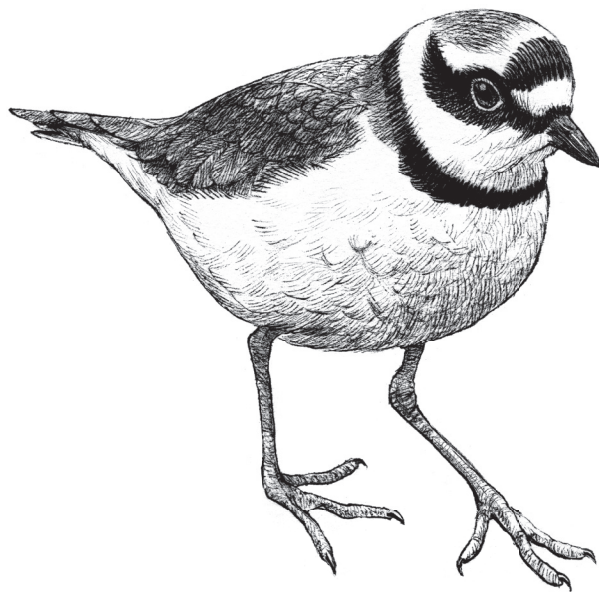


◎洪水とともに生きる

チドリ

Charadrius sp.

全長16〜20センチメートル程度の小型の鳥。河川敷や海岸など砂礫地を住処とする。そう簡単に見つけられない巣と卵が特徴。



240

地面に巣をつくる鳥

私の好きな歌に「浜千鳥」という曲があります。ちょっと物悲しい歌なのですが、夜の浜辺を鋭く鳴きながら飛ぶチドリを歌ったものです。

チドリというと海辺の鳥という印象があり、それはたしかに間違っていないのですが、じつのところ、チドリは河川にも住んでいます。それも海に近いところだけでなく、河口から何十キロも遡った中・上流域にも、チドリはやってきます。

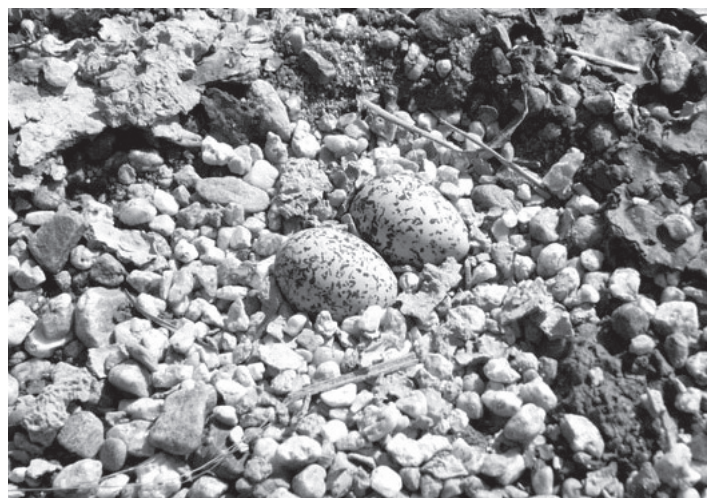
ここでは、そんなチドリの卵と巣について考えてみましょう。

チドリの巣はどこにあるのでしょうか？

普通、鳥の巣といえば、木の上に枝や枯れ草で編んだお椀型のもの、と思われるかもしれませんが、たしかにヒヨドリやカラスの巣はそんな形です。ですが、チドリの足をよく見ると、指が3本しかありません。普通、鳥は4本指なのですが、チドリは後ろ向きの1本が退化して、痕跡程度にしか残っていないのです。この足では、枝をきちんと握ることができません。

つまり、チドリは木の上に止まれないのです。

241



シロチドリの巣。地面にじかに営巣している

242

そもそも、彼らの暮らしている海岸や河川敷には、あまり木が生えていません。せいぜい草が生えている程度でしょう。チドリはこういった場所の地上に営巣します。同じく地上営巣性でも、ヒバリなどは草の陰に巣を隠す傾向があるのですが、チドリはまったく何もない、開けた砂地に営巣することも、ごく普通にあります。

普通、鳥の巣は捕食者に見つかりにくい場所に隠されています。樹洞や岩の隙間などに営巣するのも、捕食回避が大きな理由でしょう。なのに、まったく遮るものがない、むき

だしの地面に営巣しても大丈夫なのでしょう？

チドリは2つの方法で捕食を回避しています。

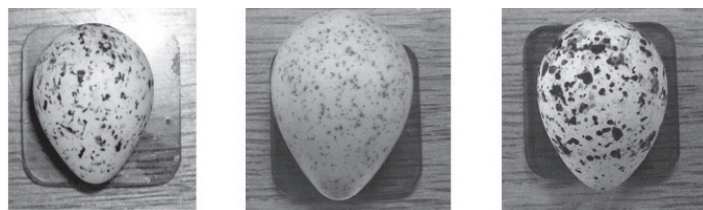
一つは、卵を抱いている親鳥の背中が隠蔽効果を発揮し、非常に見つけづらいということです。チドリの背中はいくすんだ茶色ですが、これは土や石によく似た色です。また、頭と胸に黒のはっきりしたラインがあり、これが輪郭のように見えて、鳥の形を分解してしまいます。そのため、立って歩いていればともかく、石の間に座り込んだチドリを発見するのは非常に難しいのです。

もう一つは、卵そのものの隠蔽性です。巣に危険が迫ると親鳥は巣を離れます。

外敵がどんどん接近してきた場合、いつまでも巣に座っていると、自分を目印にして巣を探されてしまう恐れがあります。また、鳥は自分ごと捕食されるくらいなら、卵を捨てるほうを選びます。生物の戦略の基本は「自分の子孫を残すこと」ですが、抱卵中に外敵が迫った場合、じっとしていると自分と卵が両方とも食べられる恐れがあり、そうなったら元も子もないからです。卵を見捨てて逃げれば、少なくとも自分は生き残るので、次の繁殖には成功するかもしれません。

さて、親が離れてしまうと、頼みは卵の隠蔽効果だけです。ところが、これが恐

243



チドリ3種の卵。左からコチドリ、イカルチドリ、シロチドリ

ろしく行き届いているために、そう簡単には見つからないのです。多分、チドリの巣を探したことがない人なら、足下にあっても気づかないでしょう。私も見つけるのにだいぶ苦労しましたし、「このあたりにある」とわかっていてもなお、見つけるのに10分くらいかかることもありましたが、ベテランの研究者（チドリの、ではありませんが、鳥類の研究では大ベテランです）でさえ、写真を撮ろうとしてカメラを出し、レンズキャップを外すために目を離したら、もう見えなくなつたと言っていました。

実際のところ、チドリの巣にばったり出会う、なんてことはめつたにないのです（もし横を通つても多分、気づきません）。巣を探すときは親鳥に注目し、卵を抱きに戻るまでじつと観察し続けます。砂礫に紛れて見えなくなりそうなチドリを望遠鏡で見続けていると、やがて、そつと周囲をうかがいながら水際を離れ、内陸へ走りだします。と

きどき足を止めて座りますが、警戒して伏せただけで、巣ではないこともしばしばです。本当の巣にたどり着くと、足を広げて巣をまたぎ、腹の羽毛を膨らませて、卵にかぶせるように体を揺すりながら座り込みます。チドリは雌雄が交代で卵を抱きますが、1羽が帰ってくるのを見つけると、卵を抱いていた個体はそつと立ち上がって巣を離れ、餌を取りに行つてしまいます。巣の近くで2羽が出会うといううな、目立つ行動はほとんどありません。親鳥の行動もまた、巣の位置の秘匿を徹底しているのです。

それでも、私が調査していた場所でのチドリの卵の孵化率は極めて低く、年によつては2割程度でした。ここまで注意しても、カラス、ヘビ、タヌキ、イタチなどに食べられてしまうわけです。もちろん状況によって孵化率は違い、もつと高いのが普通なのですが、それでもチドリの営巣が決して楽なものではないこと、もし隠蔽効果が低ければ、あつという間に全滅してしまうだろうことがわかります。

卵を隠すなら砂や小石の中

さて、チドリの卵はなぜ、そんなに見つからないのでしょうか？